

宮田敬一先生を偲ぶ

長谷川明弘(金沢工業大学)

宮田敬一先生が 2011 年 2 月 10 日の夕刻に、60 歳で他界されました。亡くなる半年程前に、日本催眠医学心理学会(以下、本会)の理事長に再任されたばかりでした。宮田先生から 1 月 16 日の夕刻に連絡があり、現在論文をご執筆されており、文献の書誌情報について確認の上、教えてほしいということで電話でお話をさせて頂きました。療養されている中、研究活動を続けておられ、私も論文を書かねばと刺激を頂戴したことを思い出します。

本会では、常任理事として、国際交流、企画・教育、研究の各委員長を歴任されました。また日本ブリーフサイコセラピー学会やブリーフセラピー・ネットワーク・ジャパンを創設され、日本の臨床心理学における効果性や効率性に焦点を当て、創造的に臨床実践をすることに一石を投じられました。「ミルトン・エリクソンの心理療法セミナー」を翻訳されただけでなく、催眠、ブリーフセラピー、そして臨床動作法に関して国内外問わず多数の業績を発表してこられました。

宮田先生との最初の出会いは、私が愛知学院大学 1 年在籍の頃(1992 年 1 月 19 日)に、吉川吉美先生(愛知学院大学)が開催された名古屋でのワークショップにおける講師としていらっしゃった機会でした。研修会後に、私が研鑽を始めてまもない催眠のことを話題にしたら、「それは古いやり方だよ」とにこやかにおっしゃったことが心に刻まれています。その数年後に、「新しい潮流」を学びたいと新潟大学大学院で宮田先生からご指導を受けることになりました。大学院生の頃、宮田先生による公立の教育センターでの臨床活動、大学内外での教育・訓練、研究指導について 1 対 1 で学ばせて頂きました。指導生の私には何か困難なことや課題があった場合に、心配していることを隠しながら、それとなく見守ってくださり、ほのめかして伝える接し方をされました。その後、改善したこと、習得したことなどを間接的に伝えてくださいました。大学院修了後も月に数回はお目にかかって障害児教育に関するコンサルテーションや臨床動作法の訓練会、心理療法の事例検討会等の機会に参加して、研鑽を積ませて頂きました。催眠に関しては、私が新潟・佐渡で講習をしたビデオを少しだけ御覧になって「まあ、いいんじゃないか。前より腕を上げたんじゃないか」といわれ、短く具体的なコメントをおっしゃいました。

宮田先生は 2001 年秋から、拠点を東京に移されました。当時、私が勤めていた飯森クリニック(心療内科)に併設の研究所にて、宮田先生にとって初めて面接料金が発生する形態での臨床活動をスタートされました。おそらく多くの方にとって海外の専門書を翻訳していらっしゃる印象が強い宮田先生ですが、実際は、臨床面でも卓越した実践の成果を上げられ、私は、利用者の主訴が解消していくのを何度も目の当たりにさせて頂きました。また事例検討会では、どんな仕組みで良くなったのかという「変化の構造」を切れ味鋭く解説して頂きました。勤務日が一緒でしたので、セッションとセッションの合間にお目にかかり、私の事例の進展が滞っている時などには、それとなくヒントを下さったりしていました。仕事の後も飯森洋史先生(飯森クリニック)を交えてお酒などを囲みながら臨床現場で起きていることや今後の展開を沢山お話しさせて頂きました。実は、この時期、私の配偶者との出会いにも宮田先生の間接的なお力添えがございました。

生前に宮田先生から蔵書をお譲りくださるといわれ、ご遺族から先日届けて頂きました。

蔵書には、専門領域に加えて、仏教や禅、道教といった東洋思想にまつわる文献が含まれ、それらは新潟にはじまり、東京、大阪への異動の中で集められた資料のようでした。宮田先生は、心理療法における東西の交流やその架け橋、東洋思想の視点について論文の内外で時折言及されていました。

宮田先生は、常に新しい方法を創造しようと模索され、研究、実践、教育のいずれにも精力的な活動をしてこられました。とても気さくで温かみがあり、鋭いことを笑顔を交えながらお話しされるお姿が思い出されます。宮田先生が、おやりになりたいことは沢山ありであったでしょうに悔やまれてなりません。まだ私自身ご指導を受けたかっただけに、とても残念でなりません。

私は、宮田先生から、直接指導を受けた一人として、宮田先生の多方面にわたる活動に対する敬意と感謝を込め、微力ながら催眠学や臨床心理学に貢献していきたいという気持ちでいっぱいです。

ここに謹んで哀悼の意を表します。